

令和8年4月9日
 学校法人獨協学園
 獨協医科大学

ADHD と身体の病気、その間にある“見落とされてきたリスク”

近年、注意欠如・多動症 (ADHD) は、不注意や衝動性といった精神症状にとどまらず、身体の健康にも広く関係する可能性が指摘されています。しかし、なぜ ADHD がさまざまな身体疾患と関連するのか、そのメカニズムは十分に明らかになっていませんでした。獨協医科大学精神神経医学講座 (主任教授 古郡規雄) の 菅原典夫 准教授 と 徳満 敬大 非常勤助教 らの研究チームは、日本の一般住民約 3 万人を対象とした大規模調査を実施し、ADHD 症状と身体疾患の関連、およびその背景にある要因について検討しました。

本研究では、2024 年に実施された全国インターネット調査データを用い、29,268 人の成人を対象に解析を行いました。その結果、ADHD 症状を有する人では、調査対象とした 18 種類の身体疾患とアルコール依存症のなかで、アレルギー性鼻炎以外の全てにおいて有意に高い関連 (図 1) が認められ、特に、慢性肝炎・肝硬変や慢性閉塞性肺疾患 (COPD) など強い関連がみられました。

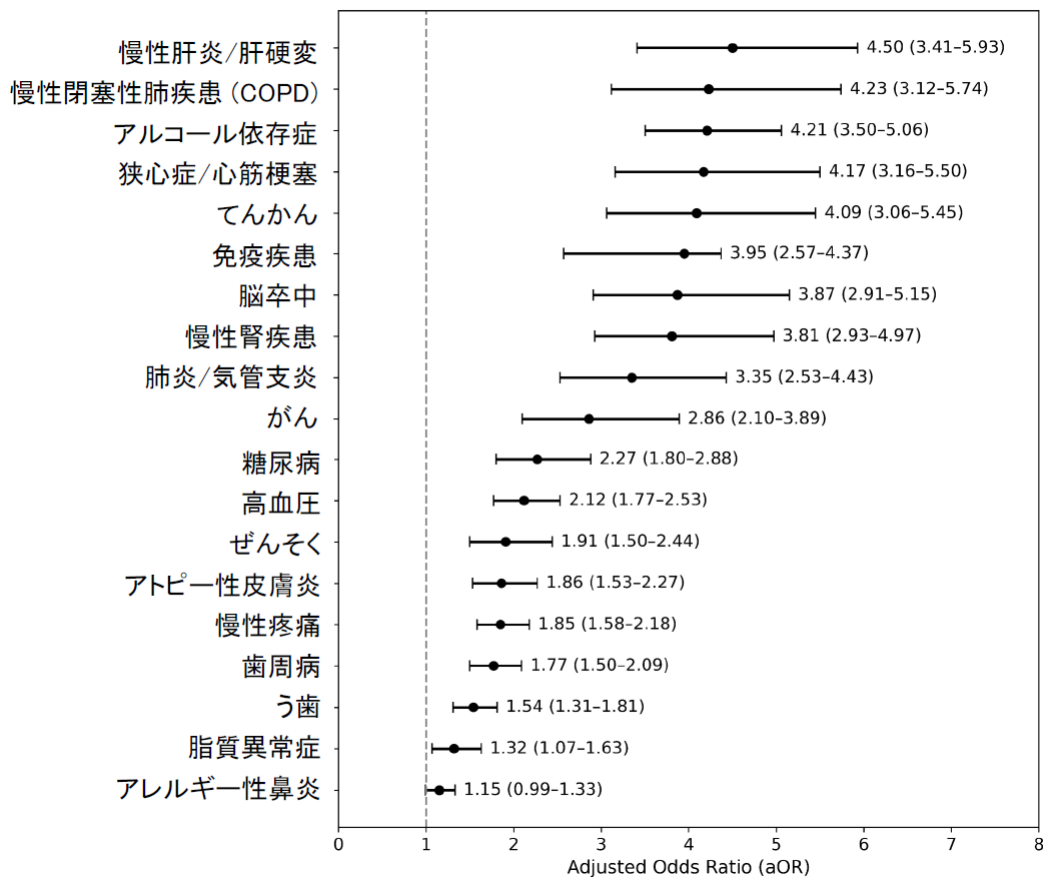
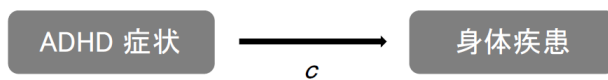


図 1 ADHD と身体疾患の関連性

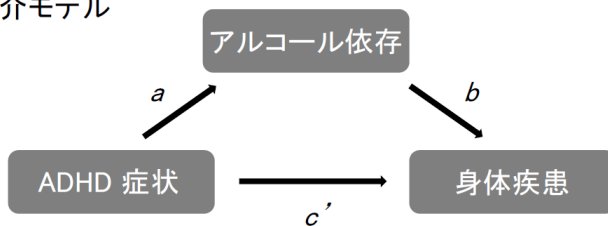
さらに本研究の重要な発見として、アルコール依存がこれらの関連の一部を「媒介」(図 2) していることが示されました。すなわち、ADHD 症状を有する人では アルコール使用障害スクリーニングテスト (AUDIT) で アルコール依存の可能性があるとされる 15 点以上の該当者が 4.2% と頻度が高く、その飲酒問題が身体疾患のリスク上昇に關与する可能性が示され、実際に、がんでは約 9 割、脳卒中では約 7 割の関連がアルコール依存を介して説明されるという結果でした。

全体効果モデル



c : 全体効果

媒介モデル



ab : 間接効果

c' : 直接効果

$ab = c - c'$

図 2 媒介モデルのイメージ

ADHD はこれまで精神疾患として理解されてきましたが、本研究は、生活習慣や行動を介して身体疾患にも広く影響を及ぼしうることを示しています。特にアルコール依存は介入可能な要因であることから、ADHD の診療において飲酒行動への評価や支援を組み込むことが、身体健康の改善につながる可能性があります。本研究は、ADHD と身体疾患を結びつける新たな経路を明らかにしたものであり、精神医療と身体医療を統合した包括的な健康管理の重要性を示唆しています。なお、本研究成果は国際学術誌 Scientific Reports の電子版で先行公開されています。

書誌情報および本件取材についての問い合わせ先は、以下の通りです。

論文 : Mediating role of alcohol dependence in the associations between adult ADHD symptoms and a wide range of physical comorbidities. Sci Rep. 2026 (in press)

著者 : Keita Tokumitsu, Norio Sugawara, Takahiro Tabuchi, Norio Yasui-Furukori

【研究チーム】

獨協医科大学精神神経医学講座 : 古郡規雄主任教授、菅原典夫准教授、徳満敬大非常勤助教
 東北大学大学院医学系研究科 公衆衛生学分野 : 田淵貴大准教授

本件に関するお問い合わせ先
 獨協医科大学精神神経医学講座 菅原 典夫 (すがわら のりお)
 電話 (代表) 0282-86-1111 e-mail: nsuga3@dokkyomed.ac.jp